



Family pharmacy and medication adherence among older adults in Japan: A cross-sectional study of JAGES 2019.

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 浜松医科大学 公開日: 2024-03-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 田村, 元樹 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10271/0002000137

博士（医学）田村 元樹

論文題目

Family pharmacy and medication adherence among older adults in Japan: A cross-sectional study of JAGES 2019.

（日本の高齢者におけるかかりつけ薬局と服薬アドヒアランスの関連: JAGES2019 横断研究）

論文の内容の要旨

〔はじめに〕

高齢者における服薬アドヒアランスの不良は、有害な薬物相互作用や不適切な服薬を引き起こすため、世界的な問題となっている。服薬アドヒアランスの不良により、医師は患者の治療効果を正しく判断できず、不必要な処方や副作用が生じる可能性が高まる。より良い服薬アドヒアランスを確保するために、薬局による介入が推進されている。例えばドイツではかかりつけ薬局が推進されており、2016 年、日本でもかかりつけ薬局制度が導入された。この制度の導入は、薬歴管理を容易にすることで重複投薬や薬物相互作用を管理し、薬物療法の有効性と安全性や服薬アドヒアランスを向上させることを目的としていた。一方で、社会経済的地位と服薬アドヒアランスの関連性については議論が続いている。特に、低学歴と不良な服薬アドヒアランスの間に関連が認められたが、様々な人種や疾患において一貫して観察されたわけではない。服薬アドヒアランスの不良は患者の社会・環境的要因を改善し、患者の協力を得ることによって向上させる必要がある。そこで本研究は、1) 高齢者のかかりつけ薬局と服薬アドヒアランスとの関連を評価すること、2) 教育歴がこの関連に影響を及ぼすかどうかを調べることを目的とした。

〔患者ならびに方法〕

JAGES（Japan Gerontological Evaluation Study: 日本老年学的評価研究）において、2019 年に実施された調査に参加した 25 都道府県 61 市町村に住む 65 歳以上の要支援・要介護状態ではない 18,792 人を対象とした横断研究である。自己記入式質問票調査により回答を得た、「いつも同じ薬局で薬を受け取っているか（かかりつけ薬局の操作的定義）」を説明変数、「残薬があるか（服薬アドヒアランスの指標）」を目的変数とし、関連を評価した。交絡因子は先行研究に基づいて選定され、人口統計学的因子（性別、年齢、教育歴、家族構成）、等価所得（世帯の可処分所得を世帯人数の平方根で割ったもの）、健康状態（慢性疾患数、喫煙、薬の種類数、服薬頻度、認知機能の低下、日常生活動作自立度、抑うつ症状（15 項目の高齢者うつ尺度）、主観的健康感）、お薬手帳の所持、都市度を用いた。交絡因子を調整後の関連を調べるために修正ポアソン回帰分析を用いて、残薬ありの該当率比、95%信頼区間、p 値を求めた。さらに、教育歴による層別

解析を行った。加えて、残薬ありに対する、いつも同じ薬局で薬を受け取っていること、教育歴の交互作用の異質性の可能性を検討するため、性別と年齢ごとにサブグループ解析を行った。最後に、関連の頑健性を調べるために感度分析を行った。欠損値は研究参加者全体で 31.8%だったことから多重代入法を採用し補完した。本研究は、千葉大学（承認番号: 3342）、国立長寿医療研究センター（1274-3）、日本老年学的評価研究機構（2019-01）の倫理審査委員会より承認を受け実施した。

〔結果〕

いつも同じ薬局で薬を受け取る群は 16,592 人 (88.3%) であった。残薬なしは、いつも同じ薬局で薬を受け取る群において 9,228 人 (89.9%) であった。修正ポアソン回帰分析の結果、全ての交絡因子を調整した後も、同じ薬局ではない群よりも、いつも同じ薬局で受け取る群の残薬ありの該当率が低かった（該当率比: 0.87, 95%信頼区間: 0.82-0.92, $p < 0.001$ ）。教育歴による層別分析の結果、残薬ありの該当率比は教育歴が低い人において低かった（9 年以下: 0.82, 0.71-0.96, $p < 0.01$, 10-12 年: 0.81, 0.74-0.88, $p < 0.001$, 13 年以上: 0.96, 0.87-1.06, $p = 0.45$ ）。サブグループ解析の結果、男性（0.82, 0.69-0.97, $p < 0.02$ ）および 75 歳未満（0.81, 0.70-0.95, $p < 0.01$ ）では、残薬は教育歴 10-12 年と同様の交互作用が認められたが、女性および 75 歳では残薬との関連は認められなかった。

〔考察〕

いつも同じ薬局で薬を受け取ることが、服薬アドヒアランスの向上と関連することを報告したのは本研究が初めてである。この結果は、高齢者がいつも同じ薬局で薬を受け取ることにより、重複している薬や薬物相互作用を考慮して医療機関と調整してもらうことができ、服薬アドヒアランスを向上させる可能性を示唆している。先行研究によれば、残薬の約 40% は削減可能であるとされている。このうち、本研究結果で得られた 13~19% の残薬を減らすことは高齢者の健康にとって重要であり、薬物療法と医療費への貢献が期待される。さらに、過去の研究では 65 歳以上の成人は特定の薬局で薬を受け取ることにより、その薬局を信頼することが示されていた。加えて、薬局への信頼感が高いグループは治療を継続し、服薬アドヒアランスの向上が見られたことも報告されていた。つまり、高齢者がいつも同じ薬局で薬を受け取ることにより、薬局への信頼感が高まった結果、服薬アドヒアランスが向上するといったメカニズムが考えられる。本研究の結果は、これらの先行研究の結果を支持するものである。さらに、本研究の結果により、いつも同じ薬局で薬を受け取るとは、教育歴の高い人よりも低い人の方が有益である可能性が示唆された。教育歴の低い人は、特定の薬局から薬を受け取ることにより信頼感があり、その結果、教育歴の高い高齢者よりも薬剤師の服薬指導に素直に従うのかもしれない。ただし、本研究は横断研究であったため、今後の縦断研究による検証が必要である。本研究

の結果は、これらの要因が服薬アドヒアランスの向上に寄与している可能性を示唆している。

〔結論〕

いつも同じ薬局で薬を受け取る高齢者は、残薬が少なく、服薬アドヒアランスが良好であることが示唆された。さらに、教育歴の低い高齢者は、教育歴の高い高齢者よりもいつも同じ薬局で薬を受け取ることによる恩恵を受けている可能性がある。